

# Session

天堂まや

# Session

## –First– 始まりの物語

PM7:30。

N市金山駅。

月半ばとはいえ、金曜の夜である。

駅構内は、人と騒音に満ちていた。

N市中心部からJRで1駅という立地条件にあるこの駅は、JR・私鉄・地下鉄・市バス・タクシーが集まる、県内でも有数の総合駅だ。駅の規模としてはN市最大のN駅と比較するべくもないが、乗換の利便性の良さでは負けていない。朝から晩まで、ひっきりなしに人の往来が絶えない駅だった。

乗換客の多さを考慮してか、各交通機関を繋ぐ共通通路はかなり余裕を持って作られている。人の往来を遮る店舗が、通路脇の小規模な商店街や2階、地下街などに設けられていることにも関係しているのだろう。共通通路に面した店舗は殆どなく、往来が少ない午前中などはいっそ見晴らしがいいくらいだった。

広さは一般的な体育館2つ分ほどはあるだろうか。

その上、2階まで吹き抜けの高い天井が設えられている。

2つの利点を生かして、構内では頻繁にイベントが開催されていた。主に地域の特産物の特売会だが、稀にスポーツクラブ勧誘のミニライブなどが開かれることもある。小さいが即席のステージを用意し、インストラクターたちが、爆音に合わせて所狭しと踊って跳ねるのだ。

最近では、インターネットのブロードバンド勧誘イベントが開かれることも多い。

今日も、揃いのジャケットを着た男女が、道行く人々に無料を謳いながらモデムを

押し付ける光景がそこかしこで見られた。

スピーカーから流れる勧誘の声に、負けじと張り上げられるファースト・フード店の呼び込み。

政党のアンケートを呼びかける声に、新店舗オープンをPRするラジカセの音が交差する。

その横を、気の早い酔っ払いが鼻歌交じりに通り過ぎていった。

差し出されるティッシュを無視し、硬い表情のまま歩き去っていく壮年の男性もいた。だが、大抵は恋人や友人、同僚たちと連れ立って、楽しそうに笑いながら騒音の中を通り抜けていく。

通路の南口には、ちょっとした公園程度の広さの広場がある。小さな煉瓦を敷いた広場では、自転車小僧たちが思い思いにアクロバットを楽しんでいた。行き交う人々が迷惑そうな顔をするが、彼らは技を競うのに夢中で気付かない。

そして、広場にも通路にも、ギターを抱えた少年少女があちこちに陣取り、流行歌を声を限りに歌っていた。

大半は、自己満足の域を出ない、聞くに堪えない拙い演奏だ。

だが、本人たちも、彼らを囲む少年少女たちも気にしていないらしい。

時には一緒になって、調子外れの、恋の歌を熱唱する。

聞くとともになしに彼らの歌声を聞きながら、青年は愛器をポロンと爪弾いた。

大抵のギター小僧は、周りを同世代の少年少女数人に囲まれている。時に人数が増えることはあっても、世代を超えた観客は滅多に居ない。

だが、青年の周囲には、老若男女の人だかりが出来ていた。大学生らしい彼本人よりも実感若い少女も居たし、会社では相応の地位についていそうな壮年の男性も居た。

彼らは、一様に彼が次にどんな曲を弾くのか心待ちにしていた。

青年自身も、自分のレパートリーを脳裏に浮かべながら、次に演奏する曲を思案していた。

バラードが続いたから、次は少しテンポのいい曲にするほうがいいだろう。

しかし、自分の知っている曲は一人で演奏するにはいささか適していない。ギター2本で弾くのが一番合っている曲なのだ。

青いシャツに黒いセーターを着込んだ、洒落っ気とは縁遠いが清潔な印象のする青年は、ふと顔を上げた。

人だかりの向こう、通路の反対側の少年と目が合ったのだ。

少しきつい目をした、どこか尖った感じのする、線の細い少年だった。指輪などの

アクセサリはつけていないが、服装は年相応の洒落たものだ。

路上活動を通じてメジャーデビューした二人組みにあやかろうというのか、ギター小僧たちは、彼らの曲を好んで演奏する。今も周りから流れて来るのは、大概、彼らの曲だ。時には同じ曲を、張り合うかのように歌う少年たちも居た。

そんな中、青年は昨今の流行など知らぬ顔で、自分の好きな曲だけを奏で続けていた。

青年の選曲が人と被ったことはない。

洋楽も弾くが、彼は邦楽のレパートリーの方が圧倒的に多い。特に、梶原凧人を好んで弾く。

梶原凧人はアイドルとしてデビューしたが、途中で実力派シンガーとして転向した。現在では作詞作曲も自分でこなす、日本でも数少ない海外で通用するシンガーとして知られるアーティストだ。

バンドをバックに歌う梶原の曲は、元々ギターで弾くことを考慮されていない。現在はギター版の楽譜が出版されているが、元来バンドで演奏される曲をアレンジしてあるため、演奏には高度なテクニックを要求される。だから、こうした公の場で弾く者は滅多に居ない。誰しも、進んで恥はかきたくないだろう。

しかし、視線の先の少年だけは違った。

演奏順に違いはあれども、選択する曲が見事なくらい重なるのである。

見たところ、少年はまだ高校生である。年のことを考えると、選択する曲はかなり渋いように思う。

だが、単なるもの珍しさや挑戦心ゆえの選曲でないことは1曲聴けばわかる。彼の歌唱力とギターの腕は、生半ではない。他の少年少女の付け焼刃の腕前とは、鼻から勝負にならないだろう。

聞く側にも彼の腕前はわかるらしく、少年も周りを観客に囲まれていた。容姿故か、青年よりも、世代層が若干若い。

ふたりの視線が合ったのは、ほんの僅かなことだった。

互いの人垣が崩れた故の偶然は、長く続かない。

一瞬の邂逅。

言葉を発する間もなく、再び二人は厚い人壁に遮られる。

だが、彼らにはそれで十分だった。

青年は、迷うことなく、ギターにピックを当てた。

レパートリーの中でも、もっとも難しく、そして一人では音に幅の出来ない曲を、迷うことなく爪弾きだす。

後を追うように、もう一本のギターの音が重なった。

少年が、青年の意図を汲んで、同じ曲を奏で始めたのだ。

同じ音律。だが、微妙に音を変えて、二人は1つの曲を紡いで行く。

重厚な音に、青年の低い声が乗り、更に少年の澄んだ声が主旋律を歌う。

流れてきた音色に、周囲の人ばかりから歓声が上がる。

近くで出鱈目な演奏をしていた少女たちも、思わず手を止めた。

厳しい顔で通路を突き抜けようとしていた中年の婦人の足が止まる。

ナンパの最中だった男性が、女子大生に声をかけようとして後ろを振り返った。

聞いたことがある旋律、だが今まで聞いたことがない音に人々は耳を傾けた。

相変わらず人垣に囲まれている二人は、相手の様子など欠片も見えない。

だが、長年の相棒を相手にしているかのように、難所も易々と、そして同じタイミングでこなしていく。

リズムも音もなにもかも、全てが図ったかのように、合っていた。

青年の技巧を駆使したギターに、少年のまだ少し固さの残るギターが挑戦するかのよう搔き鳴らされ、ふたりは同時にピックを引き下ろした。

最後まで息のあった演奏に、周囲は余韻を楽しみ、そしてすかさず拍手でもって彼らを讃えた。

青年は笑顔で、少年は少し照れたような怒ったような顔で応え、それぞれにまたギターを爪弾いた。

観客たちは、またしてもふたりの息の合った演奏を聴けるのかと期待する。しかし、本人はさきほどまでの興奮をすでに忘れたかのように、前と同じように各々が好きな曲を弾き始めた。

観客たちはがっかりしたが、執拗に二人に請うこともしなかった。

止まっていた時間が動き出すように、駅に喧騒が戻ってきた。

少女たちは弾いていた曲を最初から演奏（や）り初め、中年の女性は思い出したかのように乗り換えの駅まで足早に歩いた。男性は女性を口説く言葉に余念がない。

この駅における、週末のいつもの光景だ。なにも変わったところなどない。

だが、彼らは、いつかどこかで語るだろう。

伝説のライブを生で耳にしたと。

ギターを抱えたふたりが、弱小プロダクションからメジャー・デビューするのはこの

一年後のことである。

そして、その出会いとなったセッションが全国的に知られようになるのは、それから三ヵ月後のことだった。

+

## Session あとがき

---

主人公たちの名前もなければ、台詞もないという、異色のSSです。

しかも音楽的な知識もまったくないのに、こういうものを書くのはどうかと…。

ギターのこととか、書いてあるのはまったくの嘘八百です～。信じる方がいらっしゃるとは思えませんが、一応念のため。

このSSを書くことになったきっかけは、通勤帰りに件の「金山駅」を歩いていたときのことでした。

本文中にも書きましたが、同じ歌を歌って張り合っている男の子たちがいたのですね。

そのとき、『張り合うんじゃなく、一緒に歌ったら面白いのにな』と思ったのです。

言葉もなく、ふと目が合ったときに、奏でられる音楽。

そんなことが実現したら、ちょっと素敵ですよ（笑）。現実には難しいでしょうけれども。

最後に彼らをデビューさせるのはどうしようかな、とも思ったのですが、なんとなくこのままでは終わらないような感じがしたのでデビューさせてみました。でも続きを書く気はありません（笑）。みなさまのお好きなように想像してくださいませ。

それから作中に出てきた梶原凧人は天堂のオリジナルキャラです。

かなり古いキャラなのですが設定が特殊すぎていまだに書いてあげることが出来ません。

芸能界ものなんですよねぇ。

今回、名前だけでも出せて嬉しかったですv

本当は彼のダーリン（爆）も出してあげたかったけど、それは流石に無理でした。

残念。彼はまたの機会に。

なお、この話を横から見たバージョンを「気味が嘘をついても／Session」に収録してあります。

よかったら、そちらもご一読いただければと思います。